ドイモイ下における宗教政策と社会変容

－カオダイ教聖地の観光地化を通して－

平成 19 年入学
派遣先国：ベトナム
北沢　直宏

キーワード：ベトナム、新宗教、カオダイ、共同体

対象とする問題の概要

社会主義国ベトナムは、宗教団体を国家の管理下に置いている。政府により「公認」されている宗教団体には仏教・キリスト教・イスラーム等を挙げることができるが、それと同時にカオダイ教も公認団体に名を連ねている。

カオダイ教は 20Ｃ初頭、フランスの植民地時代に設立された新宗教である。以来約 80 年、カンボジアとの国境沿いにあるタイニン省に本山を置き、フランスやアメリカとの紆余曲折を経て現在に至っている。南北統一後暫くの間は政府により活動が制限されていたが、1986 年のドイモイ後、活動を活発化させ、現在その本山は観光地となっており連日観光客が絶えない。

タイニン省にある本山

これまでのカオダイ教研究は，教団自身による歴史研究も含め、その歴史を扱ったものが多かった。しかしその一方で、政府による宗教政策の影響からか具体的な宗教生活・活動については不明である。

研究目的

人口約 8000 万のベトナムにおいて，100 万～200 万人とされる信者数をもつカオダイ教は多数派ではない。しかしその信者はベトナム南部の地域に集中し、彼らがベトナム南部社会に及ぼしている影響は大きい。本研究の目的は 1986 年のドイモイ以後のベトナム政府による宗教政策とカオダイの活動内容・現状を明らかにすることを通じて、それを取り囲むベトナム社会の理解を深めることである。具体的には信者の日常を把握すると同時に、社会主義国ベトナムにあって現在この宗教の本山が観光地と化している事実を考察する。

研究方法としては，新聞や教団発行文書などベトナム語による一次資料の読解・分析と、信者を対象とした聞き取り調査を実施する。

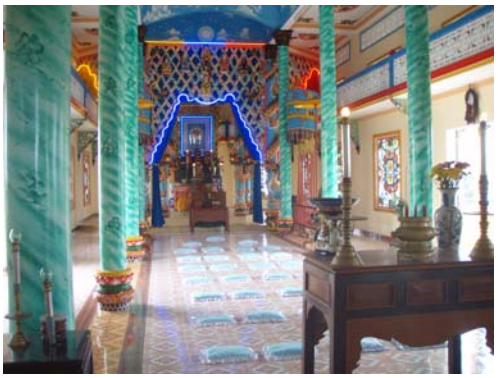
フィールドワークから得られた知見について

フィールドワークでは、ホーチミン市郊外にあるカオダイ教の寺院にて参与観察と聞き取りを行った。日々の礼拝や節目の行事に参加することができたことに加え、寺院で生活することにより信者の日常に触れる事ができたのは大きな収穫である。その結果、彼らは一つの寺院だけで閉鎖的な生活をしているわけではなく，他のカオダイ教寺院との繋がりが非常に強いことが分かった。また、彼らは同じ寺院に

住んでいても，同じような生活を営んでいるわけではない。規範となるべきタイムスケジュールがなかった事、居住する大半が学生や労働者であり極めて世俗的な性格が強かった事は，文献では知り得なかった事実であり、今後の計画を立てる上で参考になったと同時に頭を悩ませるものとなった。

調査地の寺院：外観

また、ホーチミン市総合科学図書館や市内の古書店を中心に文献資料を集めた。古書店では，教団による出版物を購入することができた。信者から入手した分も含めてカオダイ内部向けの資料を数多く入手することはできたものの、大半が教義・教団史について述べたものであり，その内容には偏りがあった。



調査地の寺院：内部

今後の展開・反省

語学力と準備不足のため、寺院に居住していたにも関わらず踏み込んだインタビューができなかった。英語が使用できる環境ではなく、さらに宗教の専門用語や思想といったものを理解する必要性を考えると、改めて現地語が必要であることを思い知らされた。また、一ヶ所の寺院に滞在したため、観察した事象が他の寺院にも当てはまるのかまでは不明であるという問題点も残している。

今後は博士予備論文執筆に向け、当分は持ち帰った資料を読み込む。今回構築した人間関係を大切にして、以後のフィールド調査に生かしていきたい。